

第7回ふくふく童話大賞 「大賞」

「達也の花」

「まったくムカつくだろ」

俺は、太田の奴からもらったサボテンを見ながら、幼なじみの優太に言った。

「うん。お前の新しい先生、イヤなやつだな」

今日から新学期だ。俺も優太も六年生になった。俺の新しいクラスの担任は太田という、じいさんの先生だ。俺はがっかりした。若い兄ちゃんの先生だったら一緒に釣りに行ったり

できるのに、こんなじいさんじゃ、退屈で話をする気も起こらない。

おまけに俺は今日遅刻をしてしまった。

「竜也くん、新学期早々、いい度胸ですね」

ホウキを持って掃除をしている俺の背後から、太田は言った。  
。

「気を引き締めてもらわねばなりません」

俺は遅刻した罰に、職員室の掃除をさせられた。

「どうして遅刻をしたのですか」

俺は答えたくなかった。

「遅刻した理由を聞いてあげましょう」

「聞いてあげる」だと？偉そうに言ってるんじゃないよ。

「別に何も」

聞いてもらわなくなっちゃって俺はかまわない。

「反省の色が見られませんね。人は聞いてあげると言っているのに」

「うるせえな！理由なんて忘れたんだよ！」

すると太田は黙って職員室を出て行ってしまった。

ちよつと言い過ぎただろうか。初対面からあんな言い方をしてしまった。もう年寄りなんだから少し優しくするべきだったのかもしれない。俺は掃除の手を止めてちよつと考えていた。

ガラッ！突然大きな音を立ててドアが開いたので、俺は飛び上がってしまった。

「もう終わりましたか」

そう言いながら太田が入ってきた。あっけらかんとした様子だ。

「これ、君にプレゼント」

太田は何か差し出した。見るとそれは小さなサボテンの鉢植えだった。

「今、学校の向かいの花屋で買ってきました。君にそっくりだろう」

失礼な！こんなずんぐりむっくりの、いがぐりみたいなサボテンに似ているだと？

「実は、今朝学校に来る途中で、君を見かけました。道ばたで子犬と遊んでいるので、この子は遅刻しやしないかと思ったのです。そうしたらその子は私の新しいクラスの子で案の

定遅刻してしまいました」

こいつ、知っていたのか！俺は柄にもないところを見られていた恥ずかしさと、遅刻の理由を知っているくせにあんな言い方をしてきたこいつへの腹立たしさで、頭に血がのぼってしまった。

「知ってるなら聞くなよ！」

俺はホウキを清掃用具入れに投げこむと、職員室から出ていった。

「なあ、イヤな奴だよなあ」

俺は優太の家に遊びに行ってからまだ腹を立てていた。

「でもよ、俺もこのサボテンお前に似ていると思うぜ」  
ふいに優太は言った。

「お前、口が悪くてトゲトゲしてるもんな」

優太に言われると言い返せなかった。確かに、俺は口が悪くて、いろんなやつとよくケンカになるのだ。優太は続けて言った。

「でもよ、俺、サボテン好きだぜ。トゲがピカピカ光って鋭くて、かっこいいよな」

うーん、そう言われてみると、そうだろうか。

「それによ、サボテンって、本当は優しい植物なんだってよ。俺の母ちゃんが言ってたぜ。母ちゃん出て行っちゃったから詳しい理由は聞けないけどよ」

この話はもうこれで終わった。優太の母ちゃんのことが出てきたからだ。

優太の母ちゃんは一年前に家を出て行ってしまった。ほかに好きな人ができたのだそうだ。優太は母ちゃんのことを滅多



に話さない。だから俺もあまり聞かないことにしていた。

サボテンは自分の家の玄関の靴箱の上に置いた。ここに置いとけば、ときどき母ちゃんが水をかけてくれるだろう。サボテンは体中トゲで覆われていて、指先で強く押すと少し痛かった。俺ってこんな感じなんだろうか。なんだか胸が痛かった。

梅雨も明けて、さわやかな六月の　　がそよんでいる。今日は

ちに った だ。 を しみにしていたなんて子ども  
つ くて恥ずかしいけれど、やっ り しみなんだからしよ  
うがない。俺は今日一日がずっといい 気であるように、  
いをこめて を見上げた。

「 、おい、 ！」

ささやくような が の向こうから聞こえてくる。 から  
を出してみるとそこに優太が立っていた。

「あのさあ、お いがあるんだけど」

優太は言いにくそうにしている。

「なんだよ、早く言えよ！」

今日遅刻をしたら大 だ。 なく学校においてけぼりにす

る と、太田

が言っていた。

「日母ちゃんから 話が来たんだ。今日俺に いたいんだ  
とよ」

俺は一 が止まってしまった。人 ととはいえちよつと  
する。

「でさあ、 、一緒にいてくれないか」

ええ！よりによって今日？

「お前の母ちゃんだろ、俺が行って何すんだよ！」

とは言ってみたものの、優太の　　。　　を　　。　　を見たいたら突  
き　　すことは出来そうにない。

「明日にしたら？」

できるだけ優しい　　で言ってみた。

「明日にはまたどっか　　くに行ってしまうんだよ」

俺たちは学校とは反対　　へ行く　　スに　　り　　んだ。

「　　ち　　わせの　　に行くだけだ　　！話は自分だけでしろよ  
！」

俺は　　スの　　から　　を　　めながら言った。

家に　ると　ちゃんがものす　い　で俺に　し　めた。  
学校に行かないでそのまま　うところに行ってしまったのだ  
から、当然と言えば当然だ。それがばれたのは、朝、　って  
も　　っても俺が来ないので、太田が家に　話をしてきたから  
だ。母ちゃんは　でたまらなかつたらしく、　どく　いて  
いる。俺は学校に行かなかつた理由を話してしまった。

ピン　ン

玄関の　が　　った。ドアを開けると太田が立っていた。太

田の　　しに、　　っ　　な　　けも　　に飛び　　んできた。　　気  
が　　くて、　　もさ　　しかっただろう。

「ああ、　　ってきていますね」

「うちの　　カ　　子が大　　をおかけしました」

そう言う　　と　　ちゃんは、俺が学校に行かなかつた理由まで話  
してしまった。

「それはいいことをしましたね」

太田は俺に向かって言った。ほめられたくてやったんじゃないやな  
い。俺はそ　　つ　　を向いた。

「やつ　　り、　　の様子からは　　もつかない花を　　かせる

「

で見ると、太田はサボテンをじつと見つめているようだった。

「今度そんな大 な用 ができたら、 をなさい」

それから太田は、 ちゃんと母ちゃんに をして っていた。

俺はしばらく が過ぎるのを って、太田がもう っていないのを確 してから、 カ月 りにあいつからもらったサボテンに をやった。

すると のトゲトゲの から小さな花が とつ、 を出し  
ていた。 つ な花びらは一 一 とても らかかった。

そう言えば太田が 後に言った も、いつになく優しかった  
。